

中山道 69 次ウォーキング 18 日目

武佐-16.5km-守山-5.1km-草津-約 7km-(瀬田駅)

11 月 5 日、前回到達の近江鉄道武佐駅を 8 時スタート、快晴、日差しが眩しく、サンングラスをかけて歩き始める。

### 鏡の宿、源平盛衰

義経宿泊の館跡碑



武佐と次の守山宿との距離は 16.5km と長いので、間(あい)の宿の「鏡の宿」が中間にあり、その鏡の宿はさしずめ「義経づくし」。最初は「義経宿泊の館あと」、と言っても石碑のみ、



鏡神社の入口、○で囲んだのは烏帽子掛けの松



次は鏡神社で「義経元服の地」のノボリが何本も翻っている。鏡神社にお参りして鈴を鳴らし、道中の無事を祈る。牛若丸は吉次と奥州に行く途中、この地で元服して九郎義経となった。

鏡神社の入口にあるのが「烏帽子掛けの松」で、元服の時にかぶった烏帽子をかけたと言われており、現在は根元 2m 程しか残っていないものの、巨木であったことが分かる。神社の隣りにあるのは「元服池」、元服の儀式でこの池の水を使用した。その儀式で使用した盥は現存していると書かれており、是非見たいものだが非公開らしい。

元服池





平家終焉の地への小道



義経づくしの次は平家。鏡神社の少し先に平家終焉の地の標識があり、その標識に従って塀と藪の間の小道を抜けると木立に囲まれて二つの石を置いた石塚がある。義経に捕らえられた平家の総大将の平宗盛とその子の清宗はこの地で首を切られ、その首は鎌倉に送られ、胴体は親子一緒にこの地に葬られた。平家終焉の地は壇ノ浦ではなく、総大将が切られたこの地とのこと。

平宗盛と清宗の墓



神戸清盛隊



平宗盛の墓に写真が立てかけられており、拡大すると「神戸清盛隊」と書かれた写真であることが分かる。清盛は神戸の福原を都としたので、神戸では人気者なのかも。

### 朝鮮人街道と背くらべ地蔵、芭蕉句碑

守山宿はもう間近、朝鮮人街道と中山道分岐の標識がある。朝鮮人街道とは「朝鮮通信使」の道のこと。背くらべ地蔵はネーミングが面白いので寄り道、「我が子もこの地蔵さんくらいにまでなれば、あとはよく育つ」と子供と地蔵の背比べをしたとか。大小二つの地蔵のどちらが背比べの対象なのか不明。その先の十輪院なる小さなお堂の敷地に芭蕉の句碑があり、句の説明は「野洲晒は、麻布を白くさらす「布晒」を専門に行っていた。その一工程に、川の中にすえた臼に布を入れ、杵でつく作業がある。冬の冷たい川に入って布をつくのは、晒の仕事のなかで最も重労働であり、その苦勞がしのばれる。」。

朝鮮人街道



背くらべ地蔵



野洲川や  
身ハ安からぬ  
さらしうす 芭蕉

## 近江富士と野洲

源平合戦の主役で若くして死に、各地に伝説を残した永遠のヒーロー義経、悪役の平家として名を残して藪の中の石塚二つ。 余りにも鮮やかな対比に感慨が深い。 野洲川にかかる野洲川橋を渡りながら優美な近江富士(三上山)を眺めて、「野洲」といえば日本 IBM の



PC の工場があり、その互換機を作る為に苦勞したことを思い出した。

その IBM の PC 事業は中国の会社に売却されて今は無く、かつての勤務先も PC 事業から手を引いて久しい。 諸行無常、盛者必衰。

## 守山宿 67 番目

野洲川を渡ると守山宿、本陣や脇本陣は残っておらず、旧家がチラホラ。 一軒の旧家に無料で見学可能と書いてあったので、休憩を兼ねて立ち寄り、無料どころか紅茶接待まであった。 この商家に「36 歌仙」の歌と絵が展示してあり、板に書かれた古びたものなので、てっきり江戸時代以前と思っただけ、調べたら明治 11 年作だった。



## 帆柱観音と東門院

帆柱観音の説明版には「最澄が唐の国で修行した帰り、海難に遭遇したが十一面観音に救われたことから、海難で折れた帆柱で十一面観音を彫り、弘仁元年(810)、吉見の里に安置した」。 当地はその吉見の里、観音は慈眼寺の御本尊とのことで早速慈眼寺に行ったが、門が閉まっていた。 もう一つのお寺の東門院は入口の仁王像の顔がよかったが、金網越しに撮った写真では顔の感じは全く伝わらない、残念。 東門院は比叡山の東門の意。

守山の名は桓武天皇が東門院行幸のとき「我が山を守り給う寺」として名付けたことから来ている。





「えんま」と「へそ」



地名標識に、焔魔堂町(何故か閻魔ではなく焔魔)とあり、変わった地名と考へていたら、十王寺なる寺があつて、その寺の



十王寺



焔魔法王小野篁御作

閻魔堂の閻魔像は焔魔法王小野篁御作と書かれています。

面白そうなので調べると、まず十王とは死後の裁きを行う 10 人の王で、閻魔大王はその一人。つまり、十王寺は閻魔寺の意味となる。

小野篁(おののたかむら)は平安前期の人で、百人一首の「わたの原 八十島かけて 漕ぎ出でぬと 人には告げよ 海人の釣舟」で有名。その篁は「夜ごと井戸を通過して地獄に降り、閻魔大王のもとで裁判の補佐をしていたという」との話があり、その小野篁が作ったのがこの地の十王寺の閻魔堂。何かオドロオドロしい話。



で、その次に現れた地名標識ははなんと「へそ」、芭蕉の句碑があつて「へそむらのまだ麦青し 春のくれ」とある。



芭蕉句碑

へそ村の名は万葉集にもでており、古くからの地名。身体へのそ(臍)ではなく、織機にかけるために縊りあわせた麻糸のことを「へそ」と言い、糸を丸める意味もあるらしく、「へそくり」のへそはこの縊。どうしてそれが地名となったのかは不明。

草津宿 68 番目

12 時頃から食堂を探していたが、2 時間ほど全く見当たらず、草津の繁華街に到着して最初の食堂に入り、カツ丼を注文、680 円也。味がどうこう言える状況ではなく、とりあえず空腹は収まる。

草津市の真ん中を流れる草津川は天井川で、高架道路のように市の中心部を貫いている。その天井川の下トンネルを抜けると道標があり、「左 中山道」「右 東海道」と書かれていて、京都を出発するとこの道標で左右に別れることになる。ここからは、5 年前に歩いた東海道と同じ道。草津宿には本陣や酒屋など古い建物が多く残っている。



草津の道標

本陣の玄関脇には菊が飾られており、時間に余裕があるので見学、入館料は 240 円也。大名が泊まる上段の間はきらびやか、一段と高い所は寝泊りの場所。一挙手一投足を監視されるわけで 1 日中窮屈だろうな、慣れればどうという事はないのかもしれないが。



草津本陣の門



上段の間

### 弁天池と化粧地蔵

草津から大津に向かう道に多いのは、地蔵の顔を白く塗り口紅もある「化粧地蔵」、これは関西に多い地蔵盆と関係しているらしい。私も関西に来て初めて地蔵盆の風習を知った。



化粧地蔵



赤い水草に覆われた弁天池

草津と瀬田の中程にある弁天池で、池の表面に赤茶色のものあり、良くみると水面に浮かんだ赤い水草。付近を散歩している人に聞いても理由はわからなかった。この赤は不吉な感じがする。

京都まであと 20Km 程、今日中になると夜の逢坂山越えとなるので、ゆっくり歩いて 16 時に瀬田駅に到着、本日は 5 万歩、三条大橋まであと 1 日。

### マンホールの蓋

鏡宿の一部は竜王町で町花「アエンボ」(コバノミツバツツジ)と松。一部は旧野洲町で今は守山宿と同じ野洲市であり、旧野洲町から出土された銅鐸の模様、真ん中の「や」は市章。



鏡宿(竜王町)



鏡宿(野洲市)



守山宿(野洲市)



